

主体的に学ぶ子供の育成

～オープン・スペース等の活用を通して～

足利市立富田小学校

1 はじめに

小学校学習指導要領では、学校教育の基本的な指針として、「学校の教育活動を進めるに当たっては、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体性に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的、基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」ということを掲げている。科学技術の革新や経済の発展とともに、社会の変化や多様化が予測できないほどの速さで進んでいる今日、“社会の変化に主体性に対応できる能力の育成”は、21世紀に生きる児童の育成をめざす学校教育の中心的な課題であるといえよう。

本校では、平成元年度から、「主体的に学ぶ子供の育成」を課題として掲げ、個々の実態に応じた学習形態を工夫することによって、主体的・意欲的な学習態度を身につけさせる試みを続けてきた。平成2年度には、オープン・スペースのある新校舎が完成し、国語・算数の能力別TT指導、学習合同授業など多様な学習展開を工夫し、実践してきた。1・2年生の理科・社会においては、生活科の内容を取り入れてきた。

平成3年度からは、研究の対象を理科・生活科まで広げて実践を続けてきた。

ここで世間に目を向けてみると、本校のようにオープン・スペースとかプレイルームとかラウンジとかよばれる学習空間をもった学校が急増している。また、子供たちの数の減少とともに「空き教室」も急増し、その「空き教室」を「オープン・スペース」に変えていくこうという動きも活発と聞く。つまり、多くの学校において学習スペースに余裕が生じてきている時期の到来と言える。

国語教育研究所の加藤幸次先生は、その著「個性化教育の創造」の中において、このオープン・スペース学校の出現について、わが国学校教育の歴史にあって「質の教育」の時代への一大変革期であると述べ、重要視しておられる。

先にも述べたように、本校では平成2年度にオープン・スペースのある校舎が完成し、それ以来その空間を活用しての試みを継続してきている。

昨年11月、足小教研理科部会の指導法研究会の会場校として、「体験や活動を通して、学習意欲を高める指導展開の工夫」と題して、その結果を発表させていただいた。ここでは、その内容と重複しないように配慮しながら、「オープン・スペースの活用」という面から、実践報告をさせていただくが、大へんに意義あることと考えている。

2 オープン・スペース（多目的スペース）利用の効果

近年、オープン・スペースを持つ学校が増えてきたことは、先にも述べた通りであるが、私たちの多くが学んだ、北側に廊下がありその南側に“はこ型”的教室が並ぶ学校に比べて、どのようなメリットがあるのだろうか。私たちの実践を述べさせていただく前に、先の加藤先生の著書から引用させていただく。

(1) 多様な指導・学習形態を組むことができる。

これまでの教室という空間より広い空間があるので、「学級一斉指導」「学級一斉学習」というパターンを越えた学習形態を組むことができる。複数学級あるいは複数学年を単位としてチーム・ティーチング（協力教授、学習組織）を組むことができる。

児童の側からいえば、「自分のクラス」以外の「となりのクラス」あるいは、「他の学年のクラス」の友達といっしょに学習できるということになる。

(2) 自由な学習空間・時間を確保することができる。

ア 定められた机からの解放

自学学習とか探求学習とか問題解決学習とかいう学習活動には、今の定められた机は適していない。つまりもっと大きな机とか作業空間を必要としている。また、二入学習や小グループ学習にも今の机は適さない。

オープン・スペースには、「教室空間」とともに、いろいろな大きさの机やテーブルを用意することができる。そして、児童たちの学習活動の場を確保してあげることができる。

イ 長期にわたる学習プロジェクトが可能になる

時間ごとに机の上を整理したり、特別教室を別のクラスに明け渡したりする必要はなく、学習活動をそのまま一時中断しておくことができる。そして、次の時間にまた連続した学習活動が続けられる。1週間とか10日間とかを必要とする学習活動も可能になる。

(3) 自己学習力を育成する学習の場が確保できる

自学学習とか探求学習とか問題解決学習という児童の主体的な学習活動をさせる時、教材にしろ、教材の使い方にしろ、児童一人一人違ってくるにちがいない。それに応える学習教材を用意することができる。印刷教材、視聴覚教材、操作教材など多種多様な学習素材と素材を使う学習具を置いておくことができる。

(4) 豊かな学習環境を構成することができる

これまでの私たちは、学習活動が始まってからいわゆる導入活動を行い学習への動機づけや意欲づけを考えてきたが、オープン・スペースを活用して適切な学習環境を構成することによって、学習以前に高い動機や意欲をもたらせることができる。

(5) 楽しい生活の場とすることができます

“ラウンジ”とか“学年フロア”といわれるオープン・スペースは、生活の場として格好である。児童がくつろいだり、おしゃべりしたり、ゲームをしたり、遊んだりする場となる。

3 オープン・スペース等を利用した実践例

ここでは、これまでいろいろと実践きた中から3つを選んで報告させていただく。一つは、いわゆるオープン・スペースを利用した5年の授業であり、二つは、ランチルームもオープン・スペースと考え、学習活動を長期にわたって行うためには最適の場と考えた1年の授業である。そして、三つめは「体育館は体育を行うもの」という固定の枠をのりこえた3年の授業である。

(1) 実践例1 オープン・スペースを利用した学年合同の授業（5年、理科）

ア 単元名　てこのはたらき

イ 単元の目標（略）

ウ 単元について

(ア) 教材観（略）

(イ) 課題とのかかわり

		廊下
5の1	5の2	

手の力だけでは持ち上げることの大へんな大きな石でも、1本の棒を使えば簡単に動かすことができる。このような活動を体験することによって、「どうしてこんなに楽に動くのだろう」「もっと小さな力で動かすには、どうしたらよいだろう」という疑問や課題の意識を持つであろう。この体験をもとにした課題意識が、子供たちの主体的、意欲的にこの働きの規則性を見い出す活動への原動力に結び付くものと考える。

(ア) オープン・スペースの活用

本校では、子供たちの主体性を伸ばすためのアプローチの一つとして、オープン・スペースの活用にも取り組んでいる。理科については、理科室の使用や器具の数量の制約もあり、学年単位の学習活動にはなじまない単元も多いが、校外観察や動きの多い活動が予想される単元では、子供たちの活動を把握する上で複数の教師による指導が有効ではないかと思う。そのような考えから、5年生ではいくつかの単元でオープン・スペースを活用した1組2組合同の学習展開を試みている。

本単元は、授業の全体的な進行を担当する教師と、それに協力する教師の連携によって指導を展開していく。一人の教師では指導の届きにくい進度の遅れた子供やグループに対して、二人の教師がチームを組んで対応しようとするものである。それによって、学級担任制の枠を大きく崩すことなく、個人差に応じた指導をねらっている。T・Tとしては初步的な段階であるが、1学期に行った「天気のかわり方」の授業も好評であった。

エ 児童の実態（略）

オ 指導計画（別紙） 総時数9時間 ※

カ 本時の指導（7／9）

(ア) 目標

左右のうでのおもりの重さや位置を変えてつり合わせる活動を通して、てこがつり合うときの規則性を見い出すことができる。

(イ) 同和教育の視点

作業の遅い子供が疎外されないように適切な援助指導をする。

(a) 展開

◎同和教育上の配慮 ○学校課題との関連

具 体 目 標	学 習 活 動	時 間 形 态	指 導 上 の 留 意 点	評 価 価 値
・てこがつり合うときの規則をつける。	1. 前時までの復習をする。 (1)おもりの位置によって、うでを傾ける働きがどう変わかるか。 (2)おもりの重さによって、うでを傾ける働きがどう変わかるか。 2. 本時の活動を確認する。 3. おもりの重さや、つるす位置を変えて、てこをつり合せ、つり合ったときの左右の「おもりの数」と「支点からの距離」を作業用紙にまとめる。 ・左のうでの「1」に、おもりを4個つくると、1個のおもりを、右のうでのどこにつるせるばかりあつかな。 ・おもりが2個なら、どこにつるせばつり合かな。 ・左のうでの重さと位置を変えたるときのうでの重さや、位置は、どうすればいいかな。	1分 — 5分 — 20分 個人	・前時までの実験を演示しながら、うでをかたむける動きがあることを見認する。 ○てこがつり合のは、どんなときだらうか。その「きまり」を見つけよう。	・規則を見つけようとする意欲を持つて、活動に入れたか。(観察)
・てこをつり合って重さをや距離を変えて重さや結果を表すことをができる。	3. おもりの重さや、つるす位置を変えて、てこをつり合せ、つり合ったときの左右の「おもりの数」と「支点からの距離」を作業用紙にまとめる。 ・左のうでの「1」に、おもりを4個つくると、1個のおもりを、右のうでのどこにつるせるばかりあつかな。 ・おもりが2個なら、どこにつるせばつり合かな。 ・左のうでの重さと位置を変えたるときのうでの重さや、位置は、どうすればいいかな。	○自由活動の前につぎの点を確認しておく。 ・最初に、左側につるすおもりの数と位置を決め、それに合う力点剛の数や位置の見通しを立てて調べていく。 ・作業用紙が終わったら、サブティーチャーに見せ、指示を受ける。 ○TTの長所を活かし、個人差に応じた指導をする。 ○机間巡査をして、とまとめている児童には、左側のおもりをつり合わせる。(チーフティーチャー) ○よくできている児童には、つりあうときの規則をとめさせ、つり合いに関する発展問題をとめさせて、理解を深めさせる。(サブティーチャー)	・見通しを立てて、右のうでのおもりの数や距離を変えることができる。(観察)	・てこがつり合うときの規則を推測できたか。(発表)
・てこがつり合うときの規則を確かめることができる。	4. 自由活動での結果をもとにして、てこがつり合うときの「きまり」を考える。 (1)グループで話し合う。 (2)考えた「きまり」通りにおもりをつるしてみて、つり合うかどうか、確かめる。 5. 「きまり」通りにおもりをつるしてみて、つり合うかどうか、確かめる。 ・おもりを6個、左うでの「2」についてみよう。 ・左のうでは、 $6 \times 2 = 12$ だ。 ・ $3 \times 4 = 12$ だから、おもり3個で、「4」の距離でつり合うだろう。確かめよう。 ・ $4 \times 3, 2 \times 6$ 、でもつり合うだろう。	15分 グループ	・考え出した規則をあてはめて、幾通りかのつり合せ方を予想させ、それらが全てつり合うことで規則の正しいとを理解させることで規則を正しくして、話題し合いに参加できない児童や、作業の遅れているグループを援助する。 ○机間巡査を通して、話題し合いには、左うでのおもりの数早くできたグループには、位置を自由に決めてつり合わせさせ、いつでも規則があてはまるこどもを確認させる。	・規則性の確認ができる(観察)
・「重さ」×「距離」が等しいとき、てこがつり合うことがわかる。	6. てこがつり合うときの規則を確認し、次時以降(3次)の計画を話し合う。	5分 — 5分 — 5分 —	・公式として理解させるとき、「おもりの数」が「重さ」であることをおさえる。 ・1次の学習活動終了時に出了「調べたいこと」を思い起させ、第3次の学習内容への意欲を持たせる。	・「重さ」×「距離」が等しいとき、てこがつり合ったか。(観察)

単元指導計画

単元名（てこのはたらき）

第5学年

9時間扱い

次 時	学 習 の 深 ま り と 美 展	⑤（めあて）・（主な活動）○（結果）	単 元 目 標				
			準 備	観 点 别	科 学 的 な 思 考	観 察 実 験 の 技 能・表 現	◎ は 重 点 目 標
関 心・意 欲・態 度	関 心・意 欲・態 度	関 心・意 欲・態 度	関 心・意 欲・態 度	関 心・意 欲・態 度	知 識	理 解	
一 て こ の は た ら き	① 1本の棒を使って、重いものを持ち上げてみよう。 ・棒の使い方を考え、試行活動をする。 ○棒を使うと、小さく自由で重いものを持ち上げることができる。	○(結果) 鉄パイプ ロープ 作業用紙1	① 1本の棒を使つて、置いたものを持ち上げる方法を考へて、置いたものを持ち上げることができる。 ○棒に持ち上げられるのかな。	・重いものを、楽に持ち上げる方法を考えることができる。	・樂に持ち上げる方法を工夫し、棒がわかる。	・「てこ」という言葉を知る。	
二 て こ の は た ら き	② どのように使うと、樂に持ち上げられるのかな。 ・物の位置を変えて、持ち上げてみよう。 ○力を入れる位置や、物の力を今まで、持ち上げて調べる。	○(結果) 鉄パイプ ロープ ブロック 作業用紙2 作業用紙3	② ここの動きをして、物の位置や、力を入れる位置を変えて、持ち上げてみよう。 ・力を加える位置はそのまままで、物の位置を変えて調べる。 ○樂に物を持ち上げるには、力を入れる位置と、物の位置の二つが関係している。	・どんなときも小さく力で持ち上げられるから、意欲的に調べる。	・物の位置や、力を加える位置を、支点、作用点の位置關係がわかる。	・てこには、「支点」「力点」「作用点」があることを知る。	
三 て こ の は た ら き	③ 大きい力、小さい力をはっきり比べてみよう。 ・力のかわりに、物を使って持ち上げてみる。 ○支点から離れるほど、小さな重さで持ち上げられる。	○(結果) 鉄パイプ ロープ ブロック 作業用紙4	③ 大きい力、小さい力をはっきり比べてみよう。 ・力のかわりに、物をつかって、調べてみる。 ○支点から離れるほど、小さな重さで持ち上げられる。	・力の大きさを比較するに比べる必要性を感じ、その方法を見つけようとする。	・力の大きさを、「重さ」に置き換えて表すことができる。	・おもりを使うと、力の大きさの違いがはっきりわかることを知る。	
四 て こ の は た ら き	④ てこがつりあうとき、何か「きまり」がありそうだ。(2次へ) ○これまで分かることを、実験用でこで確認しよう。 ・作用点のおもりはそのままに、力点の位置を支点から遠ざけていくときの、棒の傾き方を調べる。 ○同じ重さのおもりでも、つり下げる位置によって棒を傾ける働きがわかる。	○(結果) 実験用てこ おもり 作業用紙5	④ てこを利用した道具には、どんなものがあるかな。(3次へ) ○これまで分かることを、実験用でこで確認しよう。 ・作用点のおもりはそのままに、力点の位置を調べる。 ○傾いたてこをつりあわせたには、どうしたらよいかな。	・実験用でこを持つて使う。	・実験用でこが、これまでの棒のつりあきをするものであることがわかる。	・支点から力点、作用点までの距離が目盛りで読み取れることがわかる。	
五 て こ の は た ら き	⑤ てこがつりあうとき、うでを傾ける動きで、おもりの重さを変えて、つりあわせてみよう。 ・力点のおもりはそのままにして、作用点のおもりの重さを変えたりあわせてみる。 ・力点のおもりはそのままにして、作用点のおもりの位置を変えたりあわせてみる。	○(結果) 実験用てこ おもり 作業用紙6	⑤ てこがつりあうとき、うでを傾ける動きで、おもりの重さを変えて、つりあわせてみる。	・傾いているうでを傾ける動きを、一方のおもりの重さやつるす位置を重きやつるす位置の重さなどつるす位置の重さやつるす位置の重さなどをつりあわせることがであります。	・便宜的に支点の右側を力点、左側を作用点とするごとを理解する。		
六 て こ の は た ら き	⑥ 作用点の重さや位置を変えて、こをつりあわせてみよう。 ・力点のおもりはそのままにして、作用点のおもりの重さを変えて、つりあわせてみる。 ・力点のおもりはそのままにして、作用点のおもりの位置を変えたりあわせてみる。	○(結果) 実験用てこ おもり 作業用紙7	⑥ てこがつりあうとき、うでを傾ける動きで、おもりの重さを変えて、つりあわせてみる。	・てこがつりあうときの動きを、見つけようとする。	・てこがつりあうときの重さを測定することができる。	・「おもりの重さ」として、おもりの重さを測定することができる。	
七 本 時 間 き ま り	⑦ てこがつりあうときの「きまり」を見つけよう。 ・左右のおもりの重さや位置をいろいろ変えてつりあわせる。 ○てこがつりあうときは、左右のうでの「おもりの重さ×支点からのきょ」が等しくなっている。	○(結果) 実験用てこ おもり 作業用紙8	⑦ てこがつりあうときは、左右のおもりの重さやつるす位置がどのようにならうか。 ○てこがつりあうときの「きまり」を見つけよう。	・てこがつりあうときのきまりを、見つけようとする。	・てこがつりあうときの重さや位置を測定することができる。	・てこがつりあうときの重さや位置を測定することができる。	
八 て こ の は た ら き	⑧ てこを利用した道具には、どんなものがあるかな。 ・「くぎねき」について、てこをつりあうときの重さ×支点からのきょが等しくなっている。 ・生活の中でこを利用している道具を集め、実際に使ってみたり、支点、力点、作用点の位置を調べる。 ○身の周りには、てこを利用した道具がたくさんあり、生活を便利にしている。	○(結果) 鉄パイプ 作業用紙9	⑧ てこを利用した道具をさがし、その支点、力点、作用点をみつけよう。 ・「くぎねき」について、てこをつりあうときの重さ×支点からのきょが等しくなっている。	・生活の中から、てこを利用した道具をさがす。 ・ゲームや遊びを楽しむ。	・てこを利用した道具を見つけることができる。	・てこを利用した道具をいつで使うことができる。	◎ 単元のまとめとして てこを仕組み 「つりあうときのき まり」「てこを利用した道 具」について理解する。

(2) 実践例 2 ランチルームを活用した授業（1年・生活科）

ア 単元名 わたしにもできるよ

イ 目標（略）

ウ 単元について

(ア) 単元設定の理由（略）

(イ) 課題とのかかわり

この時期の子供にとって、家族や家庭は、あまりにも身近な存在であるので、家族を意識したり認識したりすることはむずかしい。そこで、媒介となる次のような活動を設定し課題にせまりたい。

○ 家族の身体の大きさに関心をもつ子供には、「手・足・体等の大きさを友達に知らせる活動」

○ 家族の仕事や会話に関心をもつ子供には、「声の擬音（インタビュー）や指人形、ペーパーサート等による劇化・動作化の活動」

○ 家族のエピソード・スタイル等に興味のある子供には、「粘土や空きびん、空きかんを利用したそっくりさん作りの活動」……等をさせたい。さらに、家族の一員としてできるお手伝いについては、それぞれの家庭で、それぞれの仕事を実践し、自分にできることは自分でやれるような意欲づけをさせたい。

本時では、どこの家庭でも共通的に起こり得る留守番とか、お客様の応対の場合どうするかという設定のもとに、留守番ごっこ（電話ごっこ）という遊びを取り入れて、相手や状況に応じて、電話による受けこたえがはっきりできるようにさせたい。

(ウ) 内容選択の視点（略）

(エ) ランチルームを学習の場に選んだ理由

○ 電話ごっこという学習活動が中心となるが、そのためには電話する相手ができるだけ遠方にいてしかも姿が見えないことが望ましいと考える。長い廊下の端と端とか校庭とかの場も考えたが、VTRを用いて学級集団による学習活動も考えているので、それらの条件を満たして、他学級にも迷惑をかけないという点から選定した。

○ ランチルームは、給食時間他クラスが利用するが、1週間ほど教室での給食に変えてもらえば、テーブル上を片づけることもなく、いつでも授業が可能という利点がある。

エ 児童の実態（略）

オ 指導計画 16時間（略）

カ 本時の指導（本時14／16）

(ア) 題目 でんわごっこをしよう

(イ) 目標 相手や状況に応じて、電話による受けこたえができるようにする。

(ウ) 同和教育上の視点

電話による話がよくできない子供に対して、励まし合いながら活動することができたか。

(2) 展開

◎同和教育上の配慮事項						◎学校課題との関連	
具 体 目 標	学 習 活 動	時 間	指 導 上 の 留 意 点		準 備	評 価	
・電話ごっこのやり方について確認することができる。	1. 本時の活動を確認する。 おるす番の電話ごっこをしよう。	5	・家族にかかってきた電話（不在の場合も含む）を取り次ぐ場面を想定し、電話ごっこをしようとする意欲をつけをする。 ・かける人（おとうさん・おかあさん）と受けける人（子ども）の役割をはっきりさせておく。		・ビニールシートまたはテープルセンター		
・電話の正しい受け方がわかる。	2. 受話器を取つたら何をどのように話すかをつかむ。 ・名前をいう。 ・ていねいにいう。 ・あいさつをする。	5	・ビデオ（電話を受けたときのよい例、よくない例）をみせて、正しい受け方をわからせる。 はい。○〇です。 まるです。 ○ さようなら。	はい——うん ○ ×	・おとうさん役（ ） ・おかあさん役（ ） ・ビデオテープ ・ふきだしメモ（でんわのうけ方）		
・役割を分担して、電話ごっこをすることができる。	3. 電話ごっこをする。 Aグループ-Bグループ Cグループ-Dグループ Eグループ-Fグループ	1 5	○1グループ（4人）を単位家族として、2つのグループで組みあわせを作り、おたがいに話をききあって活動させる。 ○グループでは、役割分担をさせ、なかなかよく助け合い励まし合って活動させる。 ・電話のあつたことを家の人伝えるために、メモをとるものも大切であることを押さえたい。		・電話機 ・メモ用紙	・お知らせタイム（各グループ）	・自分の役割に応じ楽しく電話ごっこをすることができたか。（関心・意欲・態度）
・本時の活動について自分自身をぶりかえることができる。	4. みんなの前で実演する。	1 0	・対応のよい点、なおしたい点をつかませる。 (代表グループのみ)				・自分の対応の仕方の欠点に気づき直そうとする気持ちが持てたか。（気づき）
・次時の活動の意欲を持つことができる。	5. 自己評価カードに記入する。	5	・電話の正しい受け方ができたかどうかを、評価用紙に記入させる。			・評価カード	
・	6. 電話ごっここの感想をのべよう。	5	・感想をのべあう中で、グループをかえてやりたいとか、遊びにいきたいという気持ちを出させお客様ごっこへとつなげたい。				



(3) 実践例 3 理科室と体育館の二つを利用しての授業（3年・理科、2時間続き）

ア 単元名 空気と水

イ 単元の目標（略）

ウ 単元について

(ア) 教材観（略）

(イ) 課題とのかかわり

「主体的に学ぶ子供の育成」の課題解決をめざして、本単元では、次の点をおさえて授業を展開していきたい。

○ 子供達の発達段階を考え、グループによる相談や実験活動よりも、個人または2人による実験活動に重点をおいて学習を進めていく。

○ 学習の中から出てきた子供の声「不思議に思ったこと」「もっと調べたいこと」を学習計画の中に取り入れて学習意欲を高めていく。

(ウ) 体育館を学習の場として選んだ理由

第1時は、空気の存在の意識化を図るために空気の弾力を扱ったものである。空気の存在を意識化させた後の第2時は、「空気と遊ぼう」という学習を計画したため、教室より広くて自由に体験活動がさせられる体育館へ移動することを考えた。

第1時から体育館での学習も考えたが、子供たちにはこれまで空気についての学習経験がないので、それを補うために理科室での「弾力性」の授業を取り入れた。

エ 児童の実態（略）

オ 指導計画（略）

カ 本時の指導（本時1・2／10）

(ア) 目標

- ・ 空気のバネのような感触に興味がもてる。
- ・ 空気の存在を確認できる。

(イ) 同和教育上の視点

実験を行うにあたり、2人で協力して活動できたか。

(7) 展開

◎同和教育上の配慮 ○学校課題との関連

具 体 目 標	学 習 活 動	時 間 形 態	指 導 上 の 留 意	評 価
・魔法のガスの使い方が分かり、魔法の方が分かることで興味を持つことができる。	1. 本時の第1のめあてを知る。 魔法のガスであそぼう。	6分 一齊	・CO ₂ またはN ₂ のガスボンベを用意し、「魔法のガス」と言って洗腸器に注入して、ピストンの上に消しゴムの人形を乗せ飛ばして見せる。 ・「魔法のガス」を大切にして、漏らさないように注意する。	・魔法のガスの使い方が分かり、魔法の方が分かることで興味を持つことができる。(観察)
・空気が、魔法のガスと同じようにバネのようにはたらくことによって遊べることができる。 ・空気の存在を意識することができる。 ・空気があることで、ガスや空気が漏れたことを察することができます。	2. 魔法のガスで遊ぶ。	25分 2人	○「魔法のガス」は、洗腸器に注入しやすいように固定して、4~6人に1本与え、2人一組で助け合って遊べせよう。 ①ガスをうまく入れることでできないうちは、「どうしたの」と質問してやり、「ガスが漏れて遊べないこと」を児童に確認させる。 ・「魔法のガス」の代わりに「空気」を入れても同じように人形を飛ばせることに気がついた児童には、「大発見かもしれないから、繰り返し確かめる」ように指導する。 ・ガスを入れた時に、ピストンが飛ばないようにストッパーをつける。 ・「魔法のガス」と「空気」の共通性に大部分の児童が慣いたら遊びをやめさせる。	・空気が、魔法のガスと同じようにバネのようにはたらくことができたか。 ・空気の存在を意識することができたか。 ・ガスや空気が漏れたことを察らえたか。(観察)
・魔法のガスが、空気であることがわかる。 ・空気が、バネのようであることがある。	3. 魔法のガスの正体や性質について話し合う。	4分 一齊	・「魔法のガス」のラベルの下に、「空気」のラベルを児童に明示してやる。 ・魔法のガスの正体と、空気の性質(感じ)を発表させ板書にまとめれる。(授業の場所を体育館へ移動)	・魔法のガスが、空気であることが分かる。 ・空気が、バネのようであることが分かる。(発表、観察)
・身の周りにある空気すべてが、遊びの対象であることに気付くことができる。	4. 本時の第二のめあてを知る。 空気をつかまえてあそぼう。	5分 一齊	・身の周りにあるすべての空気目に目を向けさせ、いろいろな遊び方に目を向けさせる。 ・ボリ袋に園芸用ヒニタイを使って空気を閉じ込める方法を指導する。 ・ボリ袋を乱暴に扱わぬよう指導する。 ・閉じ込めた空気の力を加えた時、見えない空気はボリ袋の中でどんな様子にならないか想像しながら遊ばせること。	・身の周りにある空気すべてが、遊びの対象であることができたか。(観察)
・体感を通して空気のバネのような性質を想像することができます。	5. 空気をボリ袋などに集めて遊ぶ。	22分 個人	○空気をうまく閉じ込めることができない児童には、園芸用ヒニタイを使用して実演してやる。 ・「中の空気は、どうなっているか。」を遊びながら、児童に考えさせる。	・体感を通して空気のバネのような性質を想像することができたか。(観察)
・ボリ袋の中の空気の様子をノートにまとめることができる。 ・空気について調べたことを見つけられる。	6. 本時で学習したことまとめ	13分 個人	・ボリ袋の中の空気の様子を絵や言葉で表現させる。 ○空気について「分かったこと」「ふしきに思ったこと」「もっとしたら空気は、どうなっているか。」をノートにまとめてやる。 ・代表的な考えは、短冊カードに書かせ黒板に掲示させる。	・ボリ袋の中の空気の様子をノートにまとめる。空気について調べたことを見つけられたか。(J-1)
・今後の学習計画を立てることができる。	7. ノートにまとめたことを発表し、今後の学習計画を立てる。	12分 一齊	○单元指導計画に予定されている学習内容や、児童が興味を示している学習内容を、今後の学習計画として取りあげていく。 ・取りあげられなかったことについては、ノートなどを通して認めている。	・今後の学習計画を立てられたか。(発表)
・次時の学習に対する反応を見ながら、单元指導計画に合う内容を選択せざるようにする。	8. 次時の学習内容を決める。	3分 一齊	・子どもの、本時の学習に対する反応を見ながら、单元指導計画に合う内容を選択せざるようにする。	・次時の学習に興味を持たたか。(観察)

5 まとめと今後の課題

わたしたちの発想は、従来までの校舎建築と変わった「教室」+「オープン・スペース」という感じで建てられた新しい校舎を活用して、本校の課題である「主体的に学ぶ子供の育成」を図るにはどうしたらよいかというものである。

しかし、今になって振り返ってみると、これまでの研究は「教室」における授業を主体に考え、さらに効率を高めるためには「場」や「学習の形態」や「学習方法」をどう工夫したらよいかを考える「教室」の枠からぬけ出せないものが多かったと反省している。

けれども、そんな中でもここにあげた5年生の実践例のように平成2年度から始まった、TT方式により子供達の学習活動をさかんにし主体性を養おうとする試みの継続や1年生のランチルームを利用しての長期にわたる生活科の実践例は、時代の要請に合った新しいものであり、引きついでいくべきものであると自負している。

さらには、子供達の活動が心も環境面でも伸び伸びとできるよう、教室の枠をこえて、体育館も学習の場に引きこんだことも意義のあることと考える。

研究を進めるうちに、年度の初めからオープン・スペースを活用した学習プログラムや学習活動を意図的に計画し位置づけておくことが大切であることを実感した。これが、わたしたちに課せられた課題といえそうである。この課題の解決は容易でないことが予測されるが先を急がず、少しつづつ積み重ねていくように努力したい。

評

新学習指導要領の完全実施にともない、近年ますます、自己教育力、自己学習力を育てることの必要性が強調されてきている。言いかえると、現状では、受け身的な子どもたちが多く、もっと“自ら学ぶ力”を育成してやらねばならないことがある。自ら学ぶ力を育成するためには、子どもたちが自ら「選択し、参加できる」学習活動を用意しなければならない。また、子ども一人一人の学習の成立を図るためにも、達成度の違いに応じた指導などを試みる必要がある。そうなってくると、伝統的な「教室」という空間の中での「一斉指導」という指導形態では、不可能であり、教育方法の多様化に対応した多目的スペースやオープンスペース等を活用した授業展開が必要となってくる。

富田小学校におけるこの実践は、時代の要請にこたえた貴重な研究であるといえる。富田小学校では、平成元年度から「主体的に学ぶ子供の育成」を学校課題として掲げ、子ども個々の実態に応じて能力別TT指導、学年合同授業など多様な学習展開を工夫し、オープンスペース等を活用しての実践に取り組まれてきた。ここには、これまでの実践の中から三つの事例をのせ、まとめられている。

5年の理科の事例では、オープンスペースを活用し、TT指導による個人差に応じた指導の工夫の実践であり、また、1年の生活科の事例では、ランチルームを学習の場として選び、長期にわたる学習プロジェクトを組み、連続した学習活動が続けられるように試みている。さらに、3年理科においては、体育館という広い空間を学習の場として、子どもたちにのびのびと自由に体験活動ができるよう工夫している実践である。

いずれにしても、子どもたちの主体性や自主性を育てること、また、個性や創造性を尊重するこれからの中学校教育においては、「教室」という制約された空間からときはなつ必要がある。子どもの数が確実に減少し、「空き教室」が増えている今日、本研究は、空き教室の利用も含め、オープンスペースの活用のあり方について、これから進むべき方向へ一石を投じられたことは大変意義深いことであると考える。今後とも、オープンスペース等の効果的な活用の仕方について継続して研究に取り組まれることを期待する。